マキアヴェッリ政治思想とフィレンツェ・ルネサンスの文化　－言説・祝祭・権力－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, 盛久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18131

氏　　名	石黒　盛久
生年月日	
本　　籍	愛知県
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	人博乙第5号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	論文博士（学位規則第4条第2項）
学位授与の題目	マキアヴェッリ政治思想とフィレンツェ・ルネサンスの文化 —言説・祝祭・権力— (Political Thought of N. Machiavelli in Florentine Renaissance Culture- Discourse・Festival・Power-)
論文審査委員	委員長　岡崎文明 委　員　柴田正良、梶川伸一 野村眞理、中島健二 根占健一（学習院女子大学教授）

学位論文要旨

本研究はマキアヴェッリの思想を、フィレンツェの政治文化の文脈から理解することを目的とする。一般にルネサンス文化と称されるこの都市の文化の劇的な展開は、それを産み出した社会の葛藤を反映している。フィレンツェ社会の葛藤は、その領域国家・中央集権国家への発展に由来する。この発展過程の分析は、フィレンツェ政治史研究の中心主題とされてきた。一方ルネサンス文化がマキアヴェッリの思想形成に与えた影響は、政治思想史家により絶えず言及されている。市民的人文主義をはじめ、ルネサンス文化の主な主題と彼の思想の連関を論じた研究は数多い。だがそれらはマキアヴェッリの思想体系とルネサンス文化を外在的に比較しているに過ぎない。フィレンツェの社会的文脈という具体的背景に即し、彼の思想形成を考察することが不可欠である。この問題意識のもと本研究は精神科学的手法に即し、マキアヴェッリの思想を「時代の連関のなかで結合されたいっさいの諸力の意義関係」の追体験を介し了解することを企図する。このような手法の活用により初めて、彼の思想の諸断層を整合的に理解することが可能となろう。

序論においては議論の背景となる、１４世紀末から１５世紀初頭にかけてのフィレンツェ政治社会史が概観される。そこで強調されるのが、フィレンツェ国家の中央集権化に伴う寡頭貴族階級の形成だ。こうした寡頭貴族階級の出現は、平民層の激しい反発を引き起こしていく。１５世紀以降のフィレンツェ政治文化は、政治主導権をめぐる〈貴族〉と〈平民〉の間の抗争を軸に展開した。両者の抗争は元老院に依拠する「制限政体」論と、大評議会に依拠する「開放政体」論という二つの政体論の対立に帰着した。本章ではマキアヴェッリの政治観が、このような政策論争に対する解答の模索を通じ、精錬されたことが主張される。こうした課題は同時に当時の祝祭にも影響を与えていた。従って同時代の祝祭芸術の意図や構造の考察は、マキアヴェッリ思想の解読に側面から照明を与えるものとなる。

第１章ではフィレンツェ政治の現実とマキアヴェッリ思想の接点として、『君主論』第９章における〈市民的君主政〉(principato civile)の問題が考察される。共和国での君主の出現

を主題とするこの概念の考察は、彼の思想の全体的把握のための視座を提供する。そこで貴族／平民の対立が議論され、両者の勢力均衡を通じ市民的君主が登場することが主張された。この過程はメディチ家の独裁の成立という現実を暗示する。加えて本章最終段においては〈公吏〉に依存する〈市民的君主政〉の脆弱性が指摘されると共に、〈臣僚〉に補佐される〈絶対君主政〉へとこれを〈上昇〉させることが主張される。この〈上昇〉こそが同時代フィレンツェの政治改革論争の核心となる。マキアヴェッリの著作は、「絶対政」への〈上昇〉の必然性を透視する証言として評価し直される必要がある。

第２章では〈市民的君主政〉から〈絶対君主政〉へというフィレンツェ政治の基本線の視覚化を、祝祭を素材に確認する。１５世紀前半フィレンツェの祝祭は、宗教的山車や馬上槍試合により構成された。諸社団を担い手とするこれらの演目は伝統的かつ自治的な性格を有していた。当時のメディチ政権はこれら諸社団の操作により、統治に対する市民の合意を確保しようとした。だが１５世紀後半状況は一転する。パッツィ陰謀事件を克服したメディチ権力は、より絶対的なものへと〈上昇〉しはじめる。古代風凱旋車の導入による祝祭の宮廷化は、政治面における権力の〈上昇〉を視覚化する。新様式の絶対主義的性格は担い手が諸社団から、細民による「祭り仲間」に移行した点にもうかがえる。細民動員による一種のボナパルティズムにより、近世絶対主義国家が形成されたと同様に、非市民大衆たる「祭り仲間」の操縦によりメディチ政権は、その権力構造にふさわしい宮廷祝祭の様式を創出していく。

第３章ではソデリーニ政権の成立が、「市民的君主政」の典型として考察される。フィレンツェにおける〈貴族〉と〈平民〉の間の対立は、メディチ没落を機に激化する。「大評議会」を核に形成された「開放政体」は、「８０人評議会」を基盤に政治主導権の回復を目指す寡頭貴族層の「制限政体」論の非難の的となった。両構想の綱引きによる政務麻痺は次第に深刻化する。起死回生策として実現したのが、ソデリーニを首班とする終身大統領制である。マキアヴェッリは彼の懐刀として重用され、その言行を間近に見聞した。『君主論』第９章の「市民的君主政」の範例はメディチ独裁とされる。だがそれ以上にソデリーニ政権の経験こそが、かかる概念形成の出発点となった。第９章がマキアヴェッリ思想全体の焦点を占めるとすれば、そこにおける君主像のモデルを提供したソデリーニ権力の考察は、『君主論』の「新君主」の意味解明上不可欠の作業となる。一方第９章の議論の核心が〈市民的君主政〉から〈絶対君主政〉への政体の〈上昇〉にあるとすれば、議論のこの方向性は同時にソデリーニ政権の諸政策の現実的意図を見定める、導きの糸を提供するものとなる。

第４章はメディチ政権にマキアヴェッリが提出した意見書、『メディチ党に告ぐ』を素材とする。マキアヴェッリはこの意見書でメディチ政権が担う課題が、「市民的君主政」から「絶対政」への〈上昇〉という点において、ソデリーニ政権の課題と同一のものであることを主張した。かかる論点は、マキアヴェッリの存在のメディチ政権における有用性を説得するものとなる。彼はこの意見書において、「大評議会」の支持に基盤をおく中央集権政治を提唱し、続く主要著作に展開される議論を錬成した。

第５章では政治文化としての祝祭が素材として取りあげられる。ターナーの提唱する「儀礼の過程」論を援用し１５１３年の謝肉祭を〈秩序〉の祝祭、１４年の聖ヨハネ祭を〈逸脱〉の祝祭と位置づける。メディチ政権は〈逸脱〉のもたらす「コミュニタス状態」を媒介に最下層市民の無意識を統合し、これを視覚芸術の象徴操作により動員することに成功した。かかる試みにより新たな文化的秩序が出現し、中堅市民層の中世共和政体観に基づく伝統的文化意識を圧倒する。この新たな文化秩序が、コジモ１世治下の宮廷祝祭文化へと開花する。

第６章では「市民的君主政」の問題が、小ロレンツォの統治の方向性とマキアヴェッリ政治思想の関連において考察される。小ロレンツォの意図は、フィレンツェに「自分の実力」

にもとづく安定した政権を確立するところに存した。この点で彼の選択は、『君主論』の新君主像と符合する。小ロレンツォの統治とマキアヴェッリ政治思想の連関の可能性を示唆する『君主論』解釈は、共和政の一局面としての君主政という理念をマキアヴェッリが堅持したとする視座に基づく。かかる解釈は寡頭貴族としての〈公吏〉を協力者とする〈市民的君主政〉と、直属〈臣僚〉を補佐者とする〈絶対君主政〉の対比をその根拠とする。こうした解釈に立つカドーニ説は、マキアヴェッリ政治思想に後期おける共和政の排他的選択という、サッソの定説と対立する。本章ではサッソ説に対するカドーニ説の思想解釈としての優越性を確認し、小ロレンツォの政策にマキアヴェッリの説く〈絶対君主政〉への〈上昇〉に向かう側面があることを検証した。

第７章はコジモ１世即位に至る政治史の概観である。小ロレンツォの死によりメディチ家の中央集権戦略は挫折した。継承者ジュリオ枢機卿の政権の方向性に関する諮問によりフィレンツェには、政治改革をめぐる百家争鳴が出現する。だが１５２３年の反メディチ陰謀は、権力の正統性の根拠を追求する政権の努力を消滅させた。続くパッセリーニ枢機卿の強権統治は「制限政体」支持者（貴族）のみならず、「開放政体」支持者（平民）の政権批判を激化させる。「ローマ略奪」を機にメディチ政権は崩壊、「最後のフィレンツェ共和国」が成立した。だがその政策の過激化により、共和国とメディチ家の妥協の可能性は消滅する。後者はハプスブルク帝国に依存し共和国を粉砕した。この経緯からも誕生したフィレンツェ公国は、議会（大評議会）の支持に基づく正統性を欠いた専制政治であった。メディチ君主権の定礎者コジモ１世の課題は政権の正統性を、国際的権威によるその承認と成立の国制史的必然性の論証という、二重の戦略により回復することであった。以下二章にわたりこの二重の戦略を、文化政策という側面から考察する。

第８章ではコジモ１世の二つの凱旋門を素材に、彼の政治文化戦略が分析される。その政治文化戦略の基調は、自身の地位の正統性の確立により公国の正統性を確立することにある。かかる戦略の実例としてのこの凱旋門の一つは、コジモの父黒隊長ジョバンニを礼賛する。凱旋門の図像の意図は、ジョバンニ＝コジモ１世とメディチ本家との血統的連続性の提示である。がそれは同時に「イタリア救済の英雄」の姿をジョバンニひいてはコジモ１世自身と重ね合わせ、彼の政権継承の正当性を血統以外の根拠によっても強調する。他方第二凱旋門の図像によるカール５世の礼賛は、その庇護を受けるコジモの国際的正統性を誇示する。また欧州に「黄金時代」を再帰させたカール５世の聖性が、フィレンツェに「黄金時代」を招来したコジモ１世の聖性へと転写されることで、メディチ政権の歴史的必然性が主張される。「黄金時代」を媒介とするアウグストゥス－カール５世－コジモ１世の神話的同一性こそ、以後メディチ家の政治文化戦略の核となるものであった。

第９章では「コジモ１世の戴冠」画における、アウグストゥス神話が論じられる。コジモが自身をアウグストゥスと同一視したことは周知である。ヴァン・ベーンの研究によれば「コジモ１世の戴冠」像は、「尊厳者」称号授与時のアウグストゥスを表現する。それは「共和国から君主政へ」の必然的展開という〈ローマ・フィレンツェ〉史観を示唆する一方、有徳の統治者の謙譲への報償としてコジモへの王号授与を促すものでもあった。これは「国際的権威によるコジモ政権の承認とその成立の国政史的必然性の論証」という、前述のコジモ政権の二重の自己正統化戦略を視覚化するものだ。「最善の市民」から「最善の君主」更には「哲人王」と向かう、政治指導者観の変貌がその背景にある。君主権のこの全能化は国家主権理念の深化と相関する。全能の国家主権の擬人化こそ全能の君主に他ならない。そしてこの両者を接合する国制的保証の探求が、市民の総意の代行機関の形成に関する「開放政体」論と「制限政体」論の抗争を産み出したのであった。

結語ではマキアヴェッリ政治思想を、近世フランスの国家形成と対比し、「未完のプロジ

ェクト」と評価する。ブルボン朝統治下の〈公吏〉の〈臣僚〉への置換＝中間的社団の除去の過程は、フランス革命をへてボナパルティズム国家に至り完成される。フランス国制史の諸段階は、貴族型〈市民的君主政〉から平民型〈市民的君主政〉更には〈絶対君主政〉へと展開する『君主論』第９章の政体変遷を、現実化するものである。他方メディチ権力は、大評議会に基盤を据える「帝国の君主政」の確立に挫折した。「共和国から君主政へ」の発展というメディチ王朝の歴史観は、現実状況におけるこの挫折を理論の次元において糊塗しようとするものであった。だがメディチ権力の実体は、かかる挫折の結果その根拠を外的権威に依存する、従属的な専制国家でしかなかった。しかし「未完の」メディチ権力とボナパルティズム国家を、マキアヴェッリ的君主像により架橋したとき、市民間の均質性を皇帝的存在の独裁が保証する、「共和政の大陸的伝統」が浮かび上がる。それは「共和政の大西洋的伝統」に連なる解釈とは異なる、いま一つのマキアヴェッリ解釈の背景となる。「共和政の大西洋的伝統」に由来する新自由主義の限界が顕わとなった今、マキアヴェッリ思想の現代的意義を、「共和政の大陸的伝統」から再考する必要があろう。

Abstract

The purpose of this thesis is to propose a consistent interpretation of N. Machiavelli's political thought. "Il principe"("The Prince") and the "Discorsi" are his most important writings. In "Il principe", he seeks the figure of the excellent monarch who will realize the unification in Renaissance Italy. On the other hand, in the "Discorsi" the superiority of republic against the monarchy is emphasized by Machiavelli. Depending on such argument of the "Discorsi", many scholars say that Machiavelli hoped to restore a republican regime like the medieval "comune" (city- state) in 16th.Century Florence. So, modern studies often suggest the inconsistency between the desire to see the appearance of ideal monarch ("Il principe") and the recommendation of republican regime (the "Discorsi") in Machiavelli's thought.

In my thesis, I will offer a consistent interpretation to this inconsistency, putting his thought in the context of Florentine Renaissance politico-cultural history trough. The principal theme in Renaissance Florentine politico-cultural history was to construct the modern centralized state. This theme was considered more serious when Italy was invaded by other foreign modern centralized states like France and Spain at the beginning of 16th,century.The series of the names of heroes in Renaissance Florence history from Cosimo "Il Vecchio ",Lorenzo "Il Magnifico" to Piero Soderini ,then finally to Cosimo I(first Grand duke of Tuscany) represents a genealogy of the powerful princes who will be able to make Republic of Florence rebirth. Above all, I compare Machiavelli's political thought with some particular aspects in the Soderini's life presidency.

From this comparison, I prove that the idea of 〈principato civile〉 discussed as the central concept of Machiavell's political thought in the chap.9 of "Il principe" was created by his political experience as the government secretary under Soderini. Finally I will conclude that, defining the prince who is desired by Machiavelli as the sovereign ruler or dictator to re-install the foundation of republic, we will be able to comprehend rationally the inconsistency between the monarchy and the republic, which Benedetto Croce called "eternal enigma".

論文審査結果の要旨

【執筆者紹介】

本論文の執筆者・石黒盛久氏は本学准教授である。筑波大学在学中に西澤龍生教授の指導下でマキャヴェリ思想の研究に取り組み乍、立川孝一教授の下で近世フランス国制史も学ぶ。大学院博士課程在学中にイタリア政府給費留学生としてフィレンツェ大学文哲学部に留学し（3年6ケ月）、リッカルド・フビーニ教授とジョヴァンニ・チプリアーニ教授に師事し、それぞれルネサンス・フィレンツェ政治制度史、メディチ政権祝祭の政治文化政策史を学び、1995年に同研究科を満期退学している。又2001年にイタリア政府よりピーコ・デッラ・ミランドラ賞を受けている。

【論文の目的】

さて、本論文は歴史学と哲学史の学際的領域における研究である。ここで氏はマキャヴェリの政治哲学の形成と16世紀ルネサンス・フィレンツェの政治制度、社会、文化の歴史との相互影響作用を解明し、合わせて近世欧州主権国家の形成に向けた展望を示すことを目的にしている。ここにディルタイの解釈学的観点を導入していることが注目される。

一般には、歴史学研究では、史料批判を梃子に資料の示す範囲で、現代から当時の時代状況を解釈し構成することが主題となる。また哲学史研究では、哲学者の思想内容をテクストに基づいて内在的に解釈し構成することが主題となる。しかし、哲学史研究では本来、単に思想を内在的に解釈し構成するだけでなくて、同時に当該の哲学者の生きた社会状況という外在的契機も加えて解明がなされなければならない。しかしこのような研究には大きな困難を伴うために、必要性は認識されつつも、十分には遂行されて来なかったのが現状である。しかし本論文は、政治社会の時代状況を哲学形成の外在的契機と見、この視点と思想内在的な視点とを往復することにより、「ルネサンス・フィレンツェ政治史の研究」と「マキャベッリの政治哲学の研究」とを学際的に融合することを試みている。このような困難な学際的領域に定位した点に本論文の独自性が存する。

【基本構想】

次に本論文の基本構想であるが、ここにもうひとつの独自性が見られる。氏は、先行の諸研究に慎重な検討を加え、その中でもカドーニ説に依拠しつつ、マキャヴェリの諸作品、特に『君主論』『ディスコルシ』における政体発展の諸契機を「権力集中」という観点から理念的に6段階に整理している。つまり、中世の(1)「封建的君主政」から出発して、(2)「コムーネの封建的共和政」、(3)「貴族型〈市民的君主政〉」の段階を越えて、近世の(4)「平民型〈市民的君主政〉」、近代の(5)「真の君主政」の段階を経て、最後に近現代の(6)「真の共和政」に到達して、権力集中が完成する。マキャヴェリのかかる発展史観の目標は「公共善」の実現という理念にあると解釈されている。因みに、この「公共善」の概念は、プラトンの『国家』の哲人王思想が目指す「善のイデア」に淵源し、ルネサンスの新プラトン主義に結実した「善」の概念の世俗化に由来するものである。またマキャヴェリの「発展史観」は後代のヘーゲルやマルクス等と同様に、ユダヤ・キリスト教に由来する歴史観であると考えられる。

【概　要】

本論文は、マキャヴェリの「公共善」の実現に向かって発展していく6段階の政体論を基軸にして、メディチ家を中心とするフィレンツェ史の具体的展開に考察を絞っている。本論文の分析の中心は、上記の第3段階と第4段階の「市民的君主政」、及び第5段階における真の君主政（絶対君主政）の亜種たる「専制君主政」である。

第1章では、『君主論』（第9章）を中心に据えて、「公吏」と「臣僚」を概念的に区別し「市

民的君主政」と「自分で支配すること」という基本概念を解明し、「市民的君主政」は、公吏を貴族から平民へと移行させることによって、貴族型から平民型へ発展し、さらに進んで公吏を廃して臣僚を使うことによって「自分で支配すること」即ち「真の君主政」(絶対君主政)へ発展すると分析している。

第2章では、平民型「市民的君主政」の頂点にある大ロレンツォ時代の祝祭を政治・社会・文化の視点を絡ませながら分析し、メディチ家権力の絶対化の過程を描き出している。

第3章では、大ロレンツォ没後にメディチ家がフィレンツェから追放され、ソデリーニ政権が成立する過程を考察している。ここでは「市民的君主政」の概念が再び分析され、歴史の進むべき方向が確認されている。マキャヴェリはソデリーニに側近として仕え、その経験を素材に『君主論』等を執筆したと考えられる。

第4章〜第7章では、ソデリーニ政権崩壊後の混乱の最中にメディチ家が再びフィレンツェに帰還し、諸葛藤の中で小ロレンツォが、メディチ家出身の教皇レオ10世と協同して、権力を回復し集中させていく過程が、祝祭文化を絡めて考察されている。そしてマキャヴェリが新君主として期待を掛けた小ロレンツォは、第5段階の「市民(細民を含む)に支持された真の君主政・絶対君主政・絶対権力」を目指しつつも(これは『君主論』において彼に提言された方向であるが)、しかし遂にこれをなし得ずに世を去ったと解釈されている。

第7章〜第9章では、小ロレンツォの急死と共にメディチ家は真の君主政(絶対君主政)への道に挫折し、この後のアレッサンドロからコジモ1世に至るメディチ政権の定礎が論じられる。この政権は、マキャヴェリがそこに陥らぬようにと警告を発したまさにその政体つまり「専制君主政」の政権である。このような袋小路に陥った過程が、図像学を駆使して描出されている。当時のフィレンツェは、ローマ教皇、神聖ローマ帝国(ハプスブルグ家)、フランスなどの大国に囲まれて、主権国家として生き延びる道が狭められており、したがって第5段階における市民の支持による「真の君主政」(絶対君主政)に進むことは現実にはできなかった。その代わりにメディチ家は帝権、教権の承認を背景にして政権を維持する道しか残されていなかったのである。したがって市民からは遊離しつつも、帝権、教権によって支持され権威づけられた政権へと戦略的に変貌せざるを得なかった。これが主権を完備できなかった国家、所謂トスカーナ大公国である。この「専制君主政」を氏は「新たな封建的君主政」と規定している。

終章では、マキャヴェリの政治哲学構想の現代に至る系譜が展望されている。彼の構想はフィレンツェでは挫折したが、大きく見れば、遅れてフランスに受け継がれ、フランス革命を経て中央集権的なナポレオン帝政国家が成立する。そしてこの政権を経て近現代的なフランスの共和政に達する。この系譜はマキャヴェリの共和主義の大陸的伝統を形成し、現代の西ヨーロッパの社会民主々義的傾向に息付いている。また他方、彼の政治哲学の構想は英米においても受け継がれ、ポーコックの言う大西洋的共和主義の伝統へと結実していく。

以上のように本論文は、マキャヴェリの思想を中世から現代に至る諸国家の多彩に転変する政治状況を分析する政治哲学の源泉と見る長大な射程を有している。この点にも氏の独自性を垣間見ることができる。

【今後の課題】

氏はイタリア留学で中心的に学んだ祝祭史と図像学を駆使して当時のフィレンツェの政治制度、社会、文化の状況を分析し描き出すことにひとまず成功してはいるが、その半面、当時の公文書、書簡などの文書資料による考証にやや手薄の感がある。また、論旨を明快にするために、祝祭と図像学の部分を第二部としてまとめるか、あるいは補論の形にしてもよかったのではないかと思われる。さらに、文章の息が長く古風で晦渋な表現が散見され、文意が伝わりきれない憾みも残る。もう少し平易な表現と明快な論運びに心遣いがあればなお良

かったのではないか。これらは今後の課題である。

【審査結論】

以上の如く、今後に課題が残るとしても、審査委員は全員一致で本論文を博士論文として「合格」と判定した。